コミュニティ施設を利用した地域活性化

【アブストラクト】
本研究では、コミュニティ施設に注目し、住民どうしのつながりをつくるための活動を行った。そこで私達は鶴ケ谷市民センターを利用して、多世代交流を目的としたビブリオバトルのイベントを開催した。結果、イベント通じて参加者同士が密に会話をすることができ、充実した時間にできた。一方で、参加人数は少なく、特に若い世代を呼び込むことができなかった。今後も市民センターを中心に地域住民同士の交流を活発化させるためには、イベントに積極的に参加しやすい状況や、行きたいと思わせる戦略を考えるべきだと思った。

キーワード：多世代交流、地域活性化、SDGs、ビブリオバトル、コミュニティ施設、学生主体

【本文】

Ⅰ．はじめに

数年前から、SDGsへの取り組みが活発になり、学校の授業内でもSDGsに関連付けた話題が多く見受けられるようになった。私達が注目したのは、11.住み続けられるまちづくり「だれもが安全で使いやすい緑地や公共の場所を使えるようにする」である。現在日本では高齢化や地域住民同士の交流の薄れが問題になっているため、住民のつながりが重要視されている。そこで、私達は住民同士の交流が活発になるような地域活性化の活動を行いたいと考えた。地域活性化の方法は様々あるが、私達は何らかの建物を利用しようと考えた。例えば、まちの活気を取り戻すために市役所機能を備えた建物をうまく利用することによって、まち全体を盛り上げることができた事例がある（図1）。高校生という立場からできることは、既存の建物をうまく活用することだ。このことから、私たちにとって身近で周辺地域に大きく影響を与えることができる建物の利用の仕方を提案することで、地域を盛り上げることができるのではないかという方向で話し合いを進めた。

私自身、地域の中で住民同士の関わりが薄くなってきている状況は、危機的だと考えている。例えば、災害が起こるなどの非常事態が発生したときに頼れるのは近所の人だと思う。何かあった時に頼れる関係、異変に気づいてもらえる関係が自身の安全につながる。昔よりも他人同士の関わりには気を使うことが多くなったが、そんな時代の今こそつながりを大切にすべきだと思う。

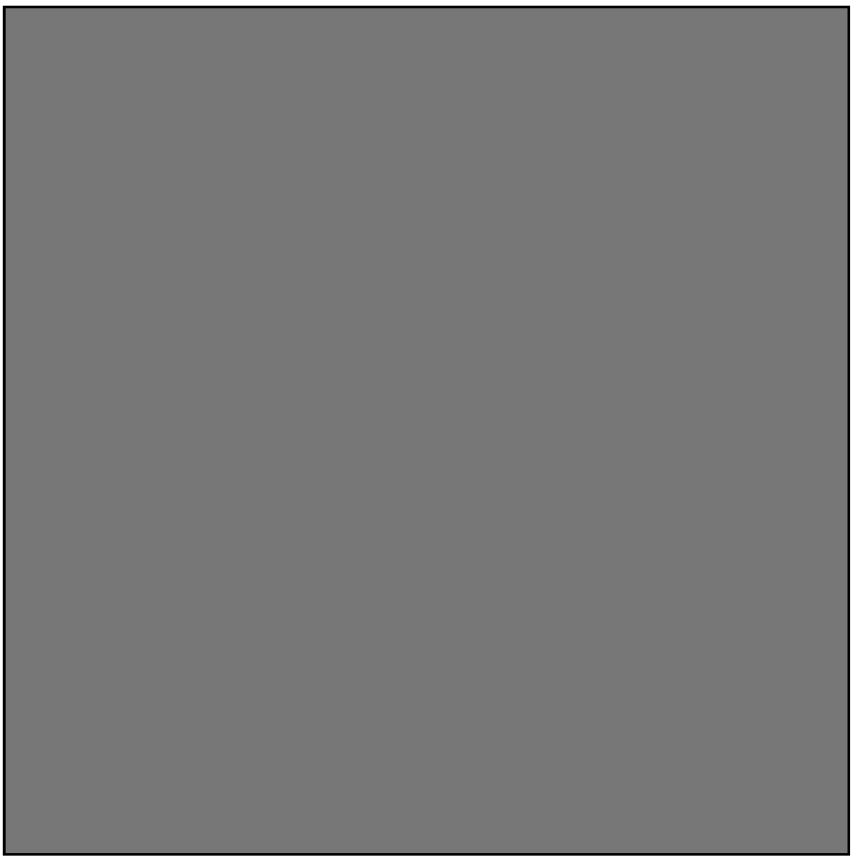

図1　朝日新聞　2024/07/04

Ⅱ．探究方法

私達は以下のような流れで探究活動を進めた(表1)。

表1　活動内容概要

1年秋	テーマ決定	過疎化が問題視される中、ドーム球場という大きな建築物の建設による地域への影響を考えることで住み続けられるようなまちづくりを目指す
↓		インターネットによる調査
1年冬	セキスイハイムスーパーアリーナ訪問	インタビュー、資料受取
	利府町町役場へ電話	ドームでの活性化は厳しいと判断→市民センターの活用を決定
1年冬から2年冬	市民センターと打ち合わせ	ビブリオバトル実施への準備
2年冬	修学旅行	堺市立図書館とさかい利晶の杜訪問　インタビュー
2年3月～3年4月	イベント実施	企画したイベントを、市民センターと打ち合わせして実施
3年5月	探求の日	研究発表

はじめに、私達は建物を利用して地域活性化を行おうと考えた。特に大型施設など、周辺地域に大きな影響を与えることができるものが良いのではないかと思い、セキスイハイムスーパーアリーナ（図3）に着目した。着目理由としては、ライブやスポーツの大会、コロナワクチン接種会場など様々な目的で利用されている大型施設であり、人が多く集まるので影響力が強いと考えられるからだ。そこで、私達は実際に訪問して調べることにした。

図2　セキスイハイムスーパーアリーナ

セキスイハイムスーパーアリーナは、利府町にある宮城県総合運動公園「グランディ・21」に位置している。グランディ・21事業企画部主幹新谷さんにお話を伺い、施設内部を見学させて頂いた。お話によると、ライブで多く使用されており、特に平成27年の嵐のスタジアムコンサートでは4日間で20万人が訪れ、県の資産では計93億円経済効果を推測したそうだ。このように、大きいイベントが開かれることによって周辺地域への経済効果はあるが、この施設で周辺住民に向けた活動はないとのことだった。そこで、私達は周辺地域の住民に向けたイベントなどを開催することで地域活性化に貢献できるのではないかと考えた。しかし、セキスイハイムスーパーアリーナは県の保有する施設のため、高校生が地域活性化のための案を考えたとしても、実行できない可能性が高いということが分かった。このことから、私達の日常生活に身近で利用しやすい建物にすべきだということが分かった。そこで、コミュニティ施設の一つである市民センターに着目した。

Ⅲ．研究内容

（1）市民センター、鶴ケ谷地域について知る

私達の学校の近くには鶴ケ谷市民センターがある。私達は鶴ヶ谷地域の高齢化に注目した。宮城野区鶴ヶ谷と青葉区の65歳以上の割合についてのグラフ（図4,5）を見てみると、青葉区よりも高年齢層の割合が多いことが分かる。今は多くの地域で高齢化が問題視されているが、鶴ケ谷地域は特に進んでいると

いえる。高齢化が進む地域では住民同士の関わりが少ないと、孤独死や緊急時の対応の遅れにつながる可能性がある。よって、高齢者が安心して暮らしていくために、地域住民同士のつながりを作るきっかけが大切である。

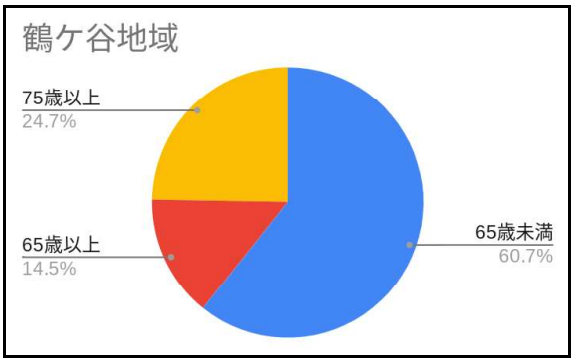

図3　宮城野区鶴ケ谷の65歳以上の割合

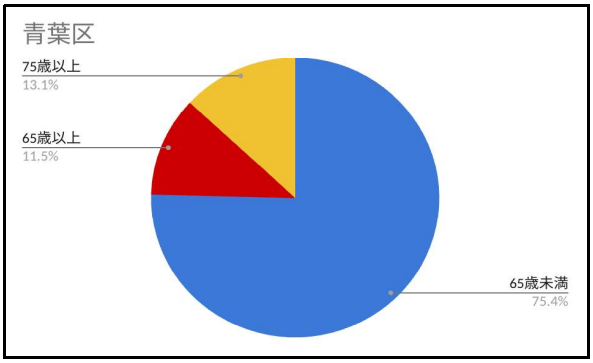

図4　青葉区の65歳以上の割合

私達は市民センターについて詳しく知るために、鶴ケ谷市民センターを訪問し、館長の今野さんにお話を伺った。市民センターの役割は「市民のニーズに応じた様々な事業を実施することで、市民一人ひとりの主体的な生涯学習活動を充実させ、地域社会のより良い形成に寄与する『人づくり』を目指す」と定義されており、世代を超えた交流を作ることができるコミュニティの場となるよう様々な企画をおこなっているそうだ。私達が訪問した時には、市民センターで活動するサークルのシニアの方々と鶴ヶ谷中学校の美術部の生徒で行われる絵画教室が開かれていた。そこでは、描き方を教えたり、質問したりすることで、多世代交流が生まれていた。他にも、仙台三校の生徒が主体で小学生向けの化学を学べるイベント「わくわくサイエンス」や、「ドローンプログラミング教室」などが実施されている。そこで、私達は幅広い年代の人々がともに参加できるイベントを行うことで、鶴ケ谷地域を盛り上げようと考えた。

(2)イベント内容の検討

幅広い年代の人々が参加でき、会話を通して関係を深めることができるゲームとして私達はビブリオバトルを提案した。ビブリオバトルとは、何人かの発表者が自分のおすすめの本を紹介し、1番読みたくなった本を投票で決めるコミュニケーションゲームだ。「本」は年齢問わず多くの人が楽しめるものであるため、多世代交流の場の話題として最適だと考えた。

図5　ビブリオバトルの流れ

仙台三校では、LHRの時間にビブリオバトルを行うことがある。普段クラスメイトと本について語る機会はほとんどないので、ビブリオバトルすることでクラスメイトの新たな一面を発見できたり、実は同じ作家さんの本が好きだったということを知れたりして、親睦を深めるのに適していると感じた。また、鶴ヶ谷市民センターには図書室があったことも決定の後押しとなった。イベントを通して自然に施設の利用を促すことができれば、継続的に利用してくれる人を増やすことができる。よって、鶴ケ谷市民センターの図書室を利用したビブリオバトルの実施を提案した(図6)。館長の今野さんや担当の荒木さんにお話したところ、賛同していただくことができたためイベントを開催する方向で進めていった。

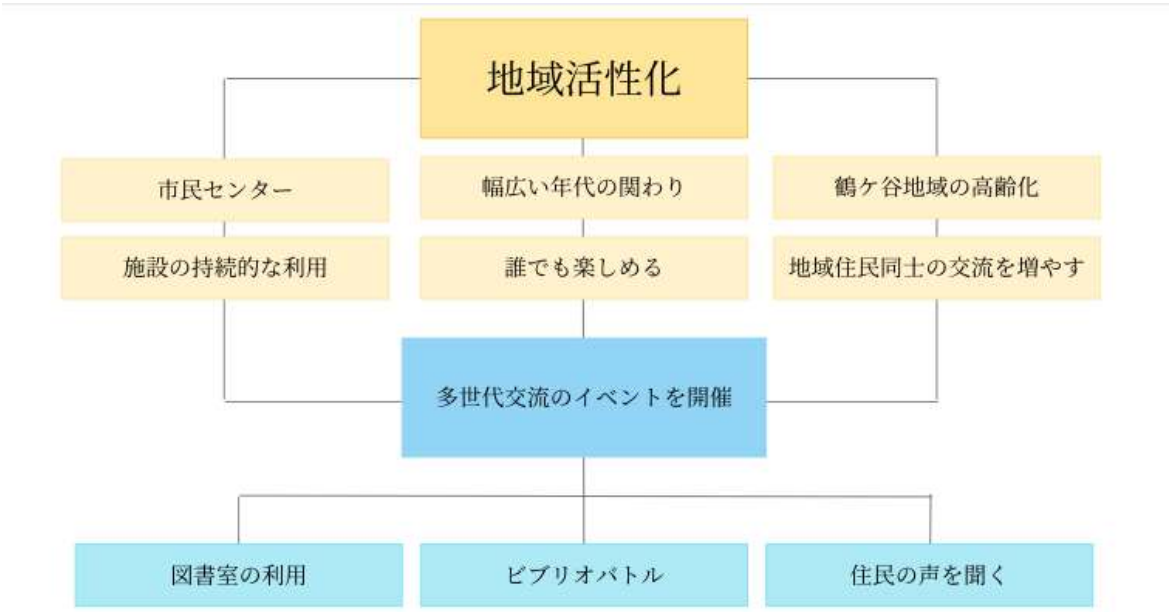

図6　イベント内容についてのフローチャート

(3)ビブリオバトルに参加しやすくするために

近年、教育の場では実施されることが多いビブリオバトルであるが、まだ内容までは詳しく知らないという人も多いと考えられる。そこで、ビブリオバトルとはどのようなゲームなのかを知ってもらうために、イベントを二回に分けて実施し、一日目に班員でデモンストレーションをし、二回目で実際に発表していただくことにした。また、ゲームの中で参加者同士がコミュニケーションを取りやすいように6人程度の小さなグループを作って円になり、座ったまま話すという形式を考えた。一般にビブリオバトルというと、発表者は前に立って話すことになるが、ビブリオバトル初心者の方が多いことを想定し、気軽に参加できるようグループ形式にした。

(4)アイスブレイクの活用

私達は修学旅行で定期的にビブリオバトルを開催している図書館に伺った。ここではビブリオバトルを行う前にアイスブレイクを行っているという。アイスブレイクとは、初対面の人との緊張感のある場を和ませるためのコミュニケーション方法のことである。ビブリオバトルは自分一人で5分程度話し続ける必要があるので、アイスブレイクを行い心の距離を縮め、緊張を緩和することで、意見交換がしやすい和やかな場を作ることができる。

(5)宣伝方法

市民センターでは今までも様々なイベントを開催してきたが、なかなか知ってもらえず、人が集まらないケースが多々あった。そこで、私たちは普段市民センター側でも行っている回覧板での鶴ケ谷市民センターだよりによる宣伝に加えて、近くのスーパーにチラシを掲示をさせていただいたり、市民センターで開催される「こども食堂」のイベントに参加し、地域住民の方々に直接声をかけさせていただいてチラシを配ったりした(図7)。チラシのデザインについては高齢の方も見やすいように文字を大きめにし、目立つカラフルなデザインにした(図8)。「ビブリオバトル」という言葉は戦いのイメージが強く、参加しづらい原因になる可能性があるので、イベントの名称は「本で話そう」にした。

図7　鶴ケ谷市民センターだより3月号

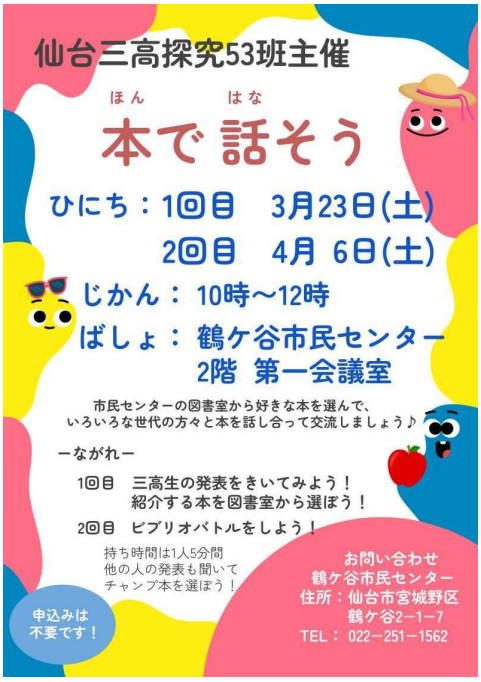

図8　イベントのポスター

(6)イベントの成果

イベントは下記のような流れで進行した(図9)。

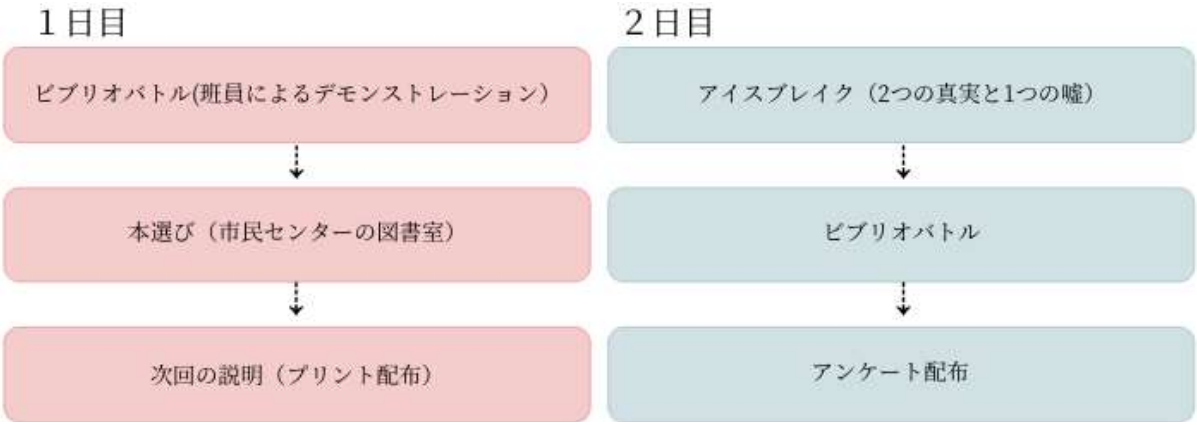

図9　イベントの流れ

1日目の参加人数は6人で、想定していたよりも少ない人数だった。班員のデモンストレーションビブリオバトルを行い、参加者の方々には投票に参加していただいた。私達の司会進行のぎこちなさもあり、少し盛り上がりに欠ける部分があった。その後、図書ボランティアの方々にご協力いただき、市民センターの図書室に移動し、それぞれが気になった本を選んだ。参加者は高校生などの若い世代との関わりに興味を持っていて参加してくださったかたとは、雑談も交えながら、本のことについて話すことができ有意義な時間となった(図10)。

図10　イベント1日目の様子

二日目は、実際に参加者の方々も発表者になる。参加人数は4人だった。ビブリオバトルを行う前にアイスブレイクを行った。今回私たちが行ったアイスブレイクは、「二つの真実と一つの嘘」というゲームだ。このゲームは、全員に自分自身についてグループの他のメンバーには知られていない3つのことを紙に書き、2つは真実で1つは作り話にする。順番に自分についての3つの「事実」を読み上げ、グループの他のメンバーはどれが本当でどれが嘘かを投票するというものだ。このアイスブレイクはとても効果的だった。参加している人とどのような距離感でやるべきか、どんな人なのかをこの時間を通して知ることができ、仲が深まる楽しい時間だった。まさに世代を超えた交流というものが実現できていたと感じた。その後、良い空気感でビブリオバトルにつなげることができた。本題のビブリオバトルで紹介された本の種類は絵本や文庫本など様々で、紹介した人自身の本に対する熱い思いが伝わってきた。何よりも聞いている側の方の雰囲気があたたかく、発表しやすい空気感が作れたことで素敵な場になったと思う(図11)。

図11　イベント2日目の様子

Ⅳ．考察

(1)班での考察

以下の資料は二回目のイベントの参加者に取ったアンケートの一部だ。(図12～図17)

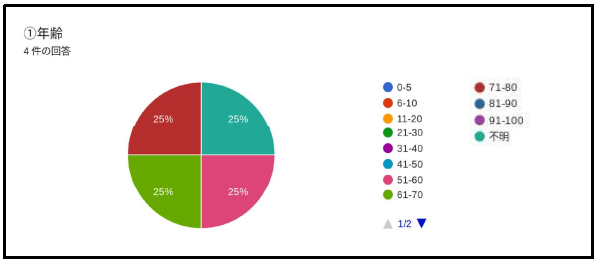

図12　参加者の年齢層

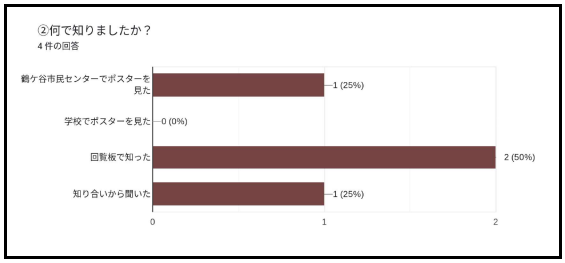

図13　情報の入手方法

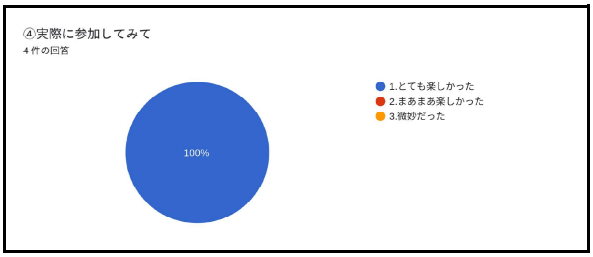

図14　イベントの充実度

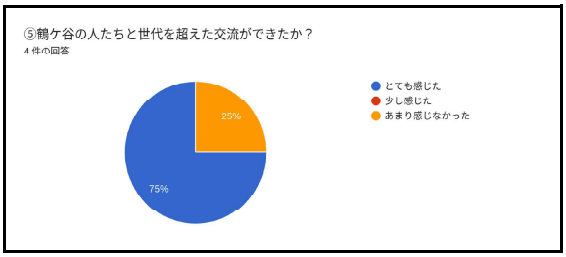

図15　多世代交流の充実度

図16　参加理由

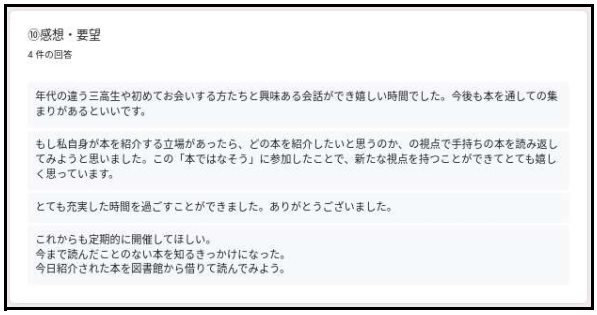

図17　感想や要望

参加者の年齢層は50～70代だった(図12)。多世代交流ということで、若い世代の参加も期待していたが、呼び込むことができなかったため、宣伝不足だと考えられる。回覧板や市民センターのポスターなどから情報を得た人が多く(図13)、普段からこのようなイベントに積極的な姿勢の人に情報を届けることはできたが、特段興味があるわけではない人に対しての宣伝は不十分だった。「こども食堂」での宣伝は効果がなく失敗に終わってしまった。特に若い世代に参加してもらうには、SNSなどの今までとは違った角度からアプローチする必要がありそうだ。

一方で、参加者の人数が少なかった分、参加者一人一人の方としっかり関わることができ、参加者の方々からは「とても楽しかった」との声をいただき(図14)、感想からも分かる通りイベント内容は充実していたと言える(図17)。今回のイベントは鶴ケ谷地域の多世代交流を促すものだったため、若い世代の参加者がいなかったことから失敗である。しかし、参加者の方は高校生である私達と関われたという意味で、世代をこえた交流ができたかという問いに対して「とても感じた」と答えた人が多かった(図15)。お話を聞いたところ、高校生と関われるという点に興味を持って来てくださった方もいたので(図16)、鶴ケ谷地域の住民ではないが,
仙台三高の生徒もこのように関わっていく活動をしていくべきだと思った。

(2)自身の考察

今回のビブリオバトルはイベント内容については成功だったと言えると思う。アイスブレイクやビブリオバトルによって短い時間の中で関係性がぐっと縮まったと感じた。私は最初、ビブリオバトルは苦手であまり

やりたいとは思っていなかった。読書は好きだが、話すとなるとうまく言えないことが多かったからだ。しかし実際に参加した際、発表後に参加者の方が「あなたの本の紹介は思いが伝わってきてとても良かったわ」と声をかけてくださり、自分の思いを届けるツールとしてビブリオバトルをすることも楽しいなと思うことができた。また、紹介される本が新しい分野に興味を持つきっかけになったので、楽しいだけでなく、自分の世界を広げることにもつながるなと感じた。今回のイベントのメインではないが、アイスブレイクはその人の人柄が分かったり、参加者の方の深い話が聴けたりして、非常に充実していた。このアイスブレイクがなければ、場が和まないままに進んでしまうことになっていたと考えられるので、とても大事なポイントだったと思う。

一方で、反省点としては宣伝不足や若い世代への対応不足が挙げられる。イベントを企画する際に何度か市民センターの職員の方と話し合いをする機会がありその際に、新しいイベントは参加者を集めるのが大変という話を聞いていた。そこで、市民センターで開かれている「子ども食堂」のイベントに私達も参加し、直接声をかけながらチラシを配った。小学生とその親世代の方が多かったが、私達の開催したイベントでは来ていただくことができなかった。若い世代に焦点を当てた宣伝活動が必要だと感じた。

(3)今後の展望

今回のイベントはあまり人が集まらなかったが、SNSの利用など若い世代への宣伝に特に力を入れて定期的にイベントを開催することで認知度を上げて、参加者の方に楽しんでいただくことで徐々に参加人数をを増やしていくことができるのではないかと思う。私達のイベントでの反省点を活かして、鶴ケ谷の地域活性化の活動を後輩に引き継ぐなどしたい。

Ⅴ．おわりに

今回の探究活動では人とつながることのすばらしさを感じた。イベント内では、普段何気なく過ごしていては話さないような人と一緒に本についてディスカッションができたり、その人の人生の一端の話を聞けたりと私にとって大きな学びの場となった。若い世代とシニア世代の交流は双方に良い影響を及ぼすものだと身を持って感じた。また、企画内容・実施のすべてを自分たちで行ったことで、責任を感じるとともにイベントが無事開催できたことで大きな達成感を得た。そして、このような機会をもっと多くの人に届けていくことで住民どうしのつながりが強いまちづくりができるのだろうと思った。地域活性化は大きな目標であるが、少しずつ周りの人との輪を広げていくことで安心して暮らせる地域を作っていきたい。

探求活動を行うにあたり、グランディ・21事業企画部主幹新谷様、鶴ケ谷市民センター館長今野様、本イベント担当荒木様をはじめ、多くの方々にご協力いただきました。心から感謝申し上げます。

参考文献

・『まちなかスタジアムを活用した地域活性化に向けた取り組みの実態と課題に関する研究』
宮川啓輝　小泉秀樹　後藤智香　2015/09/07　公益社団法人日本都市計画学会
・『ビブリオバトル ガイドブック ルール改訂版』
ビブリオバトル普及委員会　2023/09/25　子どもの未来社
・SDGsCLUB　日本ユニセフ協会　2023/08/01
https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/
・グランディ・21宮城県総合運動公園　公益財団法人宮城県スポーツ協会　2024/07/10
https://www.mspf.jp/grande21/
・仙台市鶴ケ谷市民センター　仙台市市民センター　2024/07/07

https://www.sendai-shimincenter.jp/miyagino/tsurugaya/index.html
・仙台市推計人口及び人口動態　仙台市役所　2024/07/04
https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/jinko/suike.html
・市民センター等の未来を考えよう！オンラインワークショップ報告書
町田市市民部市民総務課　2021/01/06
https://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/kurashi/center-vision/wa-kusyoppu2.files/onnrainnwa-kusyoppu.pdf
・知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト　ビブリオバトル普及委員会　2024/07/02
https://www.bibliobattle.jp/
・堺私立図書館　堺市　2024/04/02
https://www.city.sakai.lg.jp/kosodate/library/shisetu/s_tyuou.html
・さかい利晶の杜　堺市立歴史文化にぎわいプラザSAKAI縁プロジェクト　2024/07/14
https://www.sakai-rishonomori.com/